



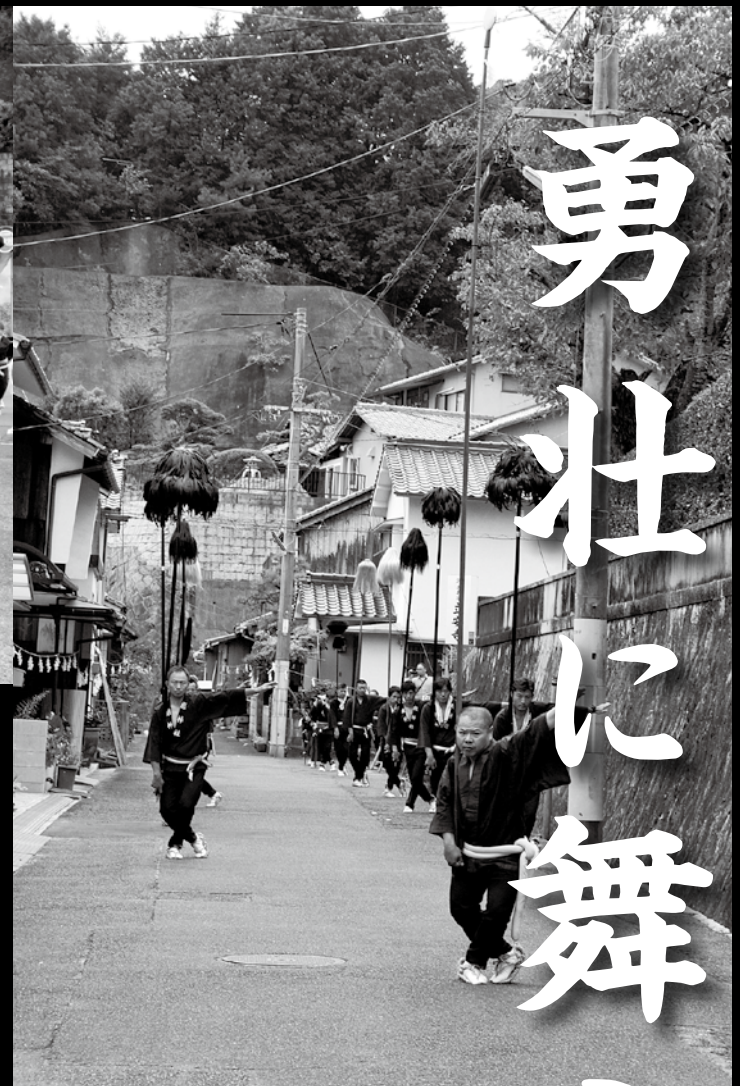
三者三様 奴行列

小方・玖波・大竹の秋祭りは、いずれも勇壮な奴行列がまちを練り歩く。これは、江戸時代の大名行列や参勤交代のときに、武器や武具を兵員とともに携行させていたことの名残である。奴には、直属の兵員のほか、地元の住民が雇われて行列に加



小方奴

長い槍を持つお目付け奴を先頭に、掛け声を出さずに静かに進む小方奴。一つ一つの仕草に緊張感が伝わる。



勇壮に舞う

大竹の秋を彩る「祭り」。五穀豊穰や家族の安全を願い、感謝する習わしとして古くから受け継がれてきた。時代の流れのなかで少しずつ形を変えてきた祭り。それでも常に、人は「祭り」に心躍らせる。

大竹奴

わって振りを披露していたことから、現在も広く各地で奴行列を見ることができ。明治時代に大名行列は消滅したが、そのときの道具一式を神社が引き取ったことが多く、「祭り」という形で現代に受け継がれてきたと考えられている。

一見すると、どれも同じような行列だが、比べてみると、声や振り方など、それぞれに特徴がある。町ごとの歴史や成り立ちの違いにより、趣の異なる奴行列が、勇壮に秋の西国街道を練り歩く。

玖波奴

威勢の良い掛け声をまちに響かせながら進む玖波奴。豪快な振り込みや槍さばぎが多く、見物客を魅了した。



掛け声に合わせて、するどい眼差しで進む大竹奴。毛槍を投げて渡す姿は大竹だけ。受け渡しに成功すると沿道から大きな拍手が沸き起こる。



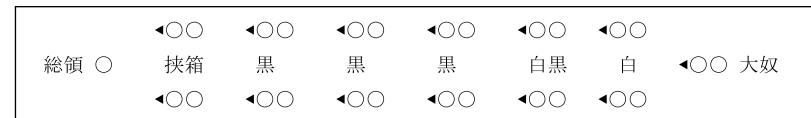
玖波祭 ～陣入奴～

厳かに力強く

玖波は、かつて西国街道の宿場として栄え、32番宿として大名が宿泊する本陣「洪量館」が置かれていた。玖波奴は、大名が本陣に入るとき、案内のため「先払い」として行った所作を継承しているため「陣入奴」と呼ばれる。

抑揚の効いた独特の掛け声が行列の到来を知らせる。先頭の箱奴の「インヨーヒー」の声に、中奴が「インヨートマジ」と続く。最後尾の大奴が「インヨーガハノヘ」と締める。「インヨー」とは中国易学の「陰陽」を指すとされ、一連の掛け声は「相反する2つの性質が調和し交わることにより、何事も前進することができる」ということを意味している。

玖波奴行列の形



◀は槍など、○は人 ※ 人数により変更することがあります。



槍は二人一組で担ぐため、随所で交代する。華麗な舞いを見せながら前後入れ替わったかと思うと、槍を受け渡す瞬間、一気に力強さを増す。見せ場は、本陣に到着したときに行う「振り込み」である。

卯建の残るまち並みを、厳肅な空気に包まれて力強く行列が進む様子は、歴史の重さと当時の風情を思い起こさせる。

迫力ある猿田彦におもわず顔がこわばる子どもたち。



(上) 慎重にガード下をくぐる。(右) 右へ左へと豪快に練り歩く、御輿の担ぎ手たち。



(左) 出発前の準備に気合が入る。(上) わらじを履いて道中をねり歩く。終わる頃には底がすり切れている。

小方祭 ～忍び奴～

一糸乱れぬ美しさ

小方奴は静寂のなかを行く。「掛け声」もなければ、槍も交代しない。拍子木から響く音に合わせて、肅々と進んでいく。これは、小方の奴行列が亀居城から出発するときの「出立ち」の所作を継承しているためと言われている。

通常、「出立ち」の朝は早い。そのため、城の周りでは物音を立てないよう、また、派手さを押さえた所作になったと考えられている。小方奴が「忍び奴」と呼ばれるのは、このためだ。



先頭を行くひとときわ長い槍が目を引き。長さは4メートル半を超え、他の槍と比べても突出している。

この長槍は「御目付奴」と呼ばれ、かつて割庄屋であった和田家が現在も保管している。祭りの前日には、御目付奴を務める者が力強い口上を述べた後、槍と衣装を借り受ける。

この細く長い槍は、終始、寸分たりとも揺らぐことはない。一点を見つめ、一糸乱れぬ様で進んでいく。

行列を包む静けさが、むしろ、その美しさを際立たせているかと思えるほど、息の合った振りを見せる。

小方奴行列の形



◀は槍など、○は人 ※ 人数により変更することがあります。



(左) 巫女が荘厳な舞を奉納する。(下) 重たい御輿を上下に振り、沿道の見物客を魅了した。



(上) 和田家で槍と衣装を借り受け、祭に向けて気を引き締める。(右) 奴の後ろを子ども侍が続く。(下) 地域の人によるバザーを開き、祭りを盛り上げた。



大竹祭

～道中奴～

軽快に華やかに

「アーヨイナ」「アイヤサノサー」威勢のよい掛け声に乗って行列が進む。大竹祭は、宗像三女神の三女である湍津姫が次女の田心姫に会いに行く様を表している。その道のりをにぎやかにし、楽しませるため、山車や奴行列が飾り立て案内している。大竹奴は、江戸時代からの大名行列を直接引き継いだものではなく、岩国市関戸地区から伝承されたとされている。その歴史は古く、明治初期には、すでに奴行列が祭りに彩りを添えていたそうだ。

「道中奴」と呼ばれる大竹奴は華麗さが際立っている。終始、足を高く上げながら軽やかに進む様は独創的で、それだけでも見応えがある。槍の交代ともなるとなおさらで、受け手が舞いながら前に出て反転すると、放たれた槍は、直立のまま見事その手に納まる。

が交代を打診する合図である。持

ち手の「アイヤサノサー」が了解の返事となり、一連の動作が始まる。

一般的に宿場や城から離れた道中では、ある程度、自由な所作が許されていたと考えられているが、槍を投げ放つての交換は、全国的にも珍しいものと言われている。

華やかで小気味よい「道中奴」が、情緒豊かに秋祭りを締めくくります。



わがふるさとに舞う三大祭

市制施行60周年記念の市民提案事業として、8月23日に歴史研究会の主催で、「スライドで見るふるさとの歴史・文化財」と題して講演会が行われました。そのなかで、会長で文化財審議会委員長でもある、島中杓雄さんから、撮りためた写真を駆使して大竹祭、小方祭、玖波祭の奴行列の特徴と違いについて、解説していただきました。その内容と企画した思いを伺いました。

この企画をした動機は、どうしてもこのまちに祭りという文化を残したいという思いからでした。

大竹市には、大きな祭りが沿岸部を中心に3つあります。御興や奴行列と内容はどれも似通っていますが、それぞれに三者三様の特徴があります。御興には大ききや担ぎ方などに違いがあります。奴にも槍の振り方や掛け声の違いがあります。違いにはちゃんとそれぞれに由来があるんですね。

そういう歴史的背景を知ること、祭りをもうと身近に感じていただくことが大切です。



「大竹市の文化を知ってほしい」と語る島中さん。

昔は、祭りの時期には里帰りする人が多くて、同級生の姿をよく見かけていたのです。祭りが来たら、家々に提灯を飾ったり、商店街ではアーチをこしらえたり、そういうものも、いつの時代からか次第になくなってしまいました。



講演会の様子

奴にしても、巫女の舞にしても何カ月も前から、相当練習をしています。当日は当日で、くたびれた顔もせず、一心不乱に槍を振り、踊つたりしている。見る人も心して見てあげなくてはいけません。

そういう「地域の文化を守ろう」という姿勢が、大竹市を盛り上げ、引いては生まれ育った「まち」を愛する気持ちにつながっていくと信じています。

大竹奴行列の形

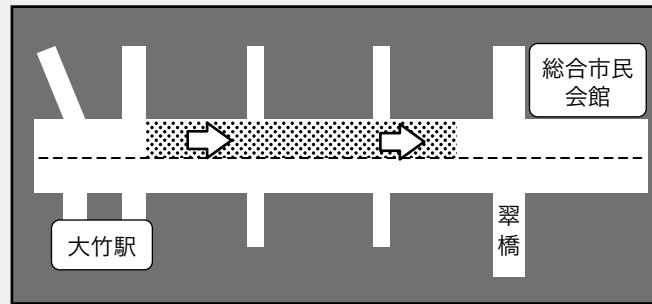


◀は槍など、○は人 ※ 人数により変更することがあります。

3つの奴行列が勢ぞろい 奴フェスティバル



問い合わせ 大竹奴フェスティバル実行委員会 (中原携帯 ☎090-1353-1467)



秋祭りを彩る大竹・小方・玖波の奴行列が一堂に会して練り歩きます。それぞれに趣の異なる行列を見比べながら、勇壮な姿をお楽しみください。

とき 11月9日(日)
10時30分～11時30分 (小雨決行)
ところ 大竹駅前～翠橋 (約400m)

歩行区間 (10時30分～12時は車両進入禁止)

(出発予定)	小方奴 10時30分	大竹奴 10時50分
	玖波奴 11時10分	※ 各20～30分程度



(上) 威勢のいい掛け声で練り歩く女性だけの華御興。(左) 「ワッショイ、ワッショイ」と子どもたちの元気のいい声が響いた。(下) 各地区が作った巨大な山車の行列が見物客を圧倒。



力強い太鼓の音色を響かせた大瀬太鼓のメンバー！

